

(別紙 2)

審査結果の要旨

氏名 林 純姫

本論文は、日本文化における面子の概念とその心理学的な意味を実証的に解明しようとしたものである。面子に関する従来の研究は、西洋的な **face** の概念の一つとして面子をとらえていたのに対し、本論文は終始日本文化における面子に焦点を当てている。

まず、第一部では、従来の研究の延長としてではなく、新たに日本文化における面子について実証的な研究を行う必要があることが、十分な説得力をもって議論されている。そして、本論文でとりあげる四つの研究課題が以下のように設定された。(1) 日本文化における面子概念の明確化、(2) 面子に影響を与える要因の解明、(3) 面子の心理的な影響の解明、(4) 面子と類似概念である自尊心との違いを確認すること。

第二部では、こうした研究課題に回答を与えるための調査および実験が報告されている。まず、調査に基づき、面子を「他者に期待されるような社会的役割の充足に関する個人の公的イメージ」と定義できることを示し(研究 1)、さらにそれが実際に普通の人間が面子と理解するものと一致することを実験によって確認した(研究 2)。次に、この定義に基づき、面子についての感じ方や面子に関連した行動の規定因を明らかにするために、状況の正式性、他者との上下関係、および親密さを操作したシナリオを被験者に提示し、面子を失うことについての被験者の認知がどのように変化するかを調べた(研究 3, 4)。その結果、フォーマルな状況における役割達成失敗の方が、インフォーマルな状況よりも、面子を失いやすいことなどが明らかにされた。また、他者との関係性によって、他者の面子を立てる行動が出やすいことも、ランダムサンプリングを用いた調査によって示された(研究 5)。さらに、面子の心理的な影響について検討するため、被験者に日記形式で日々の出来事と感情を記録してもらう日記調査という手法を用いてデータを収集している(研究 6)。その結果、自分自身の面子に関わるような経験は、不快であり、面子が守られないことは、自尊心を低下させる効果があること、などが明らかになった。そして、他者の面子を守るという利他的な行動が対人関係に及ぼす効果についても調べてみたところ、他者の面子を気遣ったり、面子を立てたりするような対人行動は人間関係を良好に保つ効果があることが明らかになった(研究 7)。最後に、面子と自尊心の違いに関しては、面子が他者の存在する状況で「失われる」のに対し、自尊心は他者が存在しなくても自己評価によって上下することなどの結果から、別の概念として扱うのが適当であることが示された(研究 8a, 8b, 9)。

以上、本論文は日本人の面子に関して初めて行われたシステムティックな研究であり、日本人の社会的認知および行動に関する研究の進歩に大きな貢献をするものである。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。